極楽寺だより

2020（令和２）年３月号

発行所：極楽寺（浄土真宗本願寺派）〒759-3803 山口県長門市三隅下野波瀬 3633 ☎0837-43-0625

春の彼岸会法要のご案内

三月四日（水）

昼一時半

講師

渋木　浄土寺住職

荻　隆宣　師

〝彼岸〟とは文字通り〝彼の岸（かのきし）〟という意味です。私達が生きている世界を〝此岸（このきし）〟というのに対し、覚りの世界・阿弥陀様のお浄土をあらわします。

お浄土は、〝西方浄土〟ともいわれます。それは、西に行けばお浄土があるからではありません。〝西〟とは太陽の沈む方向、すなわちいのちが帰ってゆく世界を、象徴的に表しているのです。

私たちは、どこに向かって生きているのでしょう。そして、どこへ帰っていくのでしょうか。

目の前のことで精一杯の現代社会は、そんなことを考えることもありません。こんな時代だからこそ、私たちの人生の行く末を見つめさせていただくご縁として、この『彼岸会法要』は、とても大切な意味があると思います。どうぞ、お誘いあわせお参りください。

「pāramitā（पारमिता）」とは、インドのサンスクリット語で、「到彼岸」（覚りの世界に到る）をあらわします。

オシエノカケラ

極楽寺だより エッセイ

声に出して、お念仏称えましょう
キャンペーン　第八弾

「応える」「ことが「救い」となる

『南無阿弥陀仏』の『南無』とは、元々インドのサンスクリット語の「ナマス（namas）」という言葉で、「尊敬する」「帰依する」「よりどころとする」という意味です。ですから、言葉の意味としては、「阿弥陀様をよりどころとします（南無します）」という意味になります。

同時に親鸞聖人は、『南無阿弥陀仏』にはもう一つの意味を味わっておられます。それは、「私を（阿弥陀仏を）よりどころとしなさい（南無しなさい）」という、阿弥陀様からの呼び声という意味なのです。

念仏詩人と呼ばれる木村無相さんに、「オーイとハーイ」という詩があります。

ナムアミダブツは　オーイと　いうこと
ナムアミダブツは　ハーイと　いうこと
オーイと　よんだら　ハーイと　こたえる

オーイも　ハーイも　ナムアミダブツ――
ひとつで　コト足る
ナムアミダブツ――
ナムアミダブツ　ナムアミダブツ

つまり『南無阿弥陀仏』とは、阿弥陀様からの「オーイ」という呼び声であり、それに応える私たちの「ハーイ」という受け止めなのです。

浄土真宗では、阿弥陀様の呼び声を聞き、受け止め、それ

阿弥陀仏（われに）
南無（まかせよ）
↓
阿弥陀様からの呼び声
↓
オーイ

阿弥陀仏（あなたに）
南無（おまかせします）
↓
私たちの応え・人生の態度
↓
ハーイ

に応えてお念仏を称えることが、救いの扉を開くのだと教えられます。

住友生命の取締役をされた金平敬之助さんの『ひと言の違い』という本に、このような話があります。

A君という中学校三年生の男の子がいました。小学校時代から不登校を続けています。この四月、担任の先生が交替してO先生になりました。もちろんO先生はA君の顔を見たこともありません。

でも、他の生徒と同様に接することにしました。毎日、「学級ノート」を自宅に届けるようにしたのです。学級ノートには連絡事項だけでなく、先生との交換日記のような、思いや返事を書く欄があります。届けるのは、クラス全員が協力してくれ、回収は近所に住む生徒に頼みました。もちろんA君は玄関にも出て来ません。お母さんを通しての受け渡しです。

生徒からの返事を書く欄は、強制はしていません。「よかったら書いてください」というものです。A君の欄はいつも空白でした。何しろ顔を見たこともない生徒ですから、何を書いたら良いのかわからないまま、O先生は毎日ひと言書き添えることを続けました。

ある時、たまたまサッカーのワールドカップ開催中だったので「応援している国は？」と一行書いたところ、なんと返事が来たのです。

「フランス」

たったひと言でも、O先生は感激しました。すぐに行動を起こして、インターネットでフランスチームの情報を集め、それをノートにペタペタ貼りつけました。その後も相変わらず、A君の書く欄は空白だったので、「ムダか」という思いもありましたが、迷いながらも先生はノートを送り続けました。

やがて、夏休みに入る一学期最後の朝でした。回収されたA君のノートを開くと、とたんに先生は涙が溢れて止まらなかったそうです。何と返事が書いてあったのです。先生はノートを握りしめて心の中で叫びました。「人間でよかった。この仕事をしていてよかった」と。

この時の返事も、やはりひと言でした。「先生ありがとう」。金平さんは、『フランス』『先生ありがとう』の『二つの

ひと言』が、先生をどんなに喜ばせたか、A君は気がついただろうか」と書いておられます。

「ムダか」と思いながらも、先生は毎日ノートを送り続けました。自分の思いは、呼びかけは、彼に届いているのだろうかと不安を抱えながら。そんな先生のもとに届いた、「フランス」というひと言が先生を喜ばせ、「先生、ありがとう」のひと言が「人間でよかった。この仕事をしていてよかった」とまで感動させたのです。

実は、この話には続きがあるのです。夏休みが終わり、新学期が始まりました。すると、何とA君が登校していたのです。先生はビックリなどというものではありません。いちばん落ち着かなかったそうです。その後、A君は無事卒業し、志望高校にも入学できました。そのことを伝えられた金平さんは、「今度は、私が気がついた」と言われています。「A君は『フランス』『先生、ありがとう』の『二つのひと言』で、実は、自らの将来をも救ったのではないだろうか」と。

呼びかけに応えることが呼びかけた方を喜ばせ、呼びかけに応えたことが自分自身を救っていく。このようなことが、現実に起こり得るのです。

自分の作った小さな枠組みに閉じこもり、世界を決め付けるのが私たちです。「こうありたい」という理想や目標は、自分を動かすエネルギーになる場合もありますが、同時に他の選択肢を奪い視野を狭めることにもなりかねません。順調な時ほど、その枠組みからはずれる人を「だから、アイツはダメなんだ」と蔑むこともあります。その蔑みは、上手くいかなくなった時に「こうではない私はダメだ」と自分を蔑み、苦しめることに繋がるのです。自分の思いが視野を狭め、自分の枠組みが周りを、そして自分自身を苦しめていく。思いや枠組みが強いほど、その苦しみは深くなるのだと仏教は教えます。

そんな思いや枠組みの外からの呼び声を聞き、受け止め、応えていくことが、実は自分を救い、周りを喜ばせることになるのです。A君が、『フランス』『先生、ありがとう』の『二つのひと言』で先生の呼び声に応えたことで、先生を「人間でよかった。この仕事をしていてよかった」と喜ばせたように。そして同時に、自らの将来を救ったように。

『南無阿弥陀仏』のお念仏とは、思いや枠組みの外からの、阿弥陀様の呼び声なのです。「オーイ。何と、小さなところに閉じこもっているのか」と、世界の広さと豊かさを示してくださる呼びかけなのです。その呼び声に素直に「ハーイ」と応えることが、自分を救うことになるのだと教えられるのです。

とは言っても、人間というものは難しく、頑なな存在ですから、なかなか素直にうなずくことはできません。親鸞聖人が、このお念仏の教えは「難信」であると言われていますが、それはまさに、私たちの側の頑なさを表わしておられるのでしょう。応えてしまえば、頷いてしまえば簡単なのに、中々素直に頷けない。いや、私にとっては素直になることが一番難しいことなのだと、日々痛感しています。

しかし親鸞聖人は、阿弥陀様は「逃げる者を追いかけてでも救い取ろう」とされる仏様だと教えてくださいました。「もうきことなく」飽きることもなく、倦むこともなく、常に常に呼び続けておられる仏様なのだと。

お念仏の歴史とは、まさに阿弥陀様の呼び声に応えられた方々の歴史なのです。お念仏を称え、呼び声を聞きながら、自分の枠組みを点検する。そんな歩みが、長い歴史を通して、今私のところにまで届けられているのです。

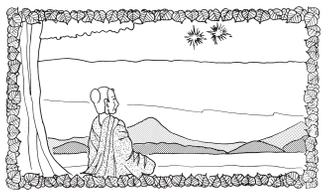
なかなか素直に頷けない私ではありますが、先を歩まれた方々の後姿を通して、少しずつ育てられていることを実感している今日この頃です。■

ご相談ください

仏事、葬儀、納骨・・、わからないこと、困ったことがあれば、ご遠慮なく極楽寺にご相談下さい。　0837（43）0625

極楽寺だよりを送りませんか

都会に出ておられる子どもさん、お孫さんたちへ。有縁の方々へ。お寺へお申し出下さい。直接郵送します。送り先が増えると、住職はうれしいのです。



極楽寺掲示伝道
けいじでんどう

2月の言葉

この言葉は、マンガ『ドラえもん』の一場面に出てくるものです。まさに名言として、多くの人の心を揺さぶってきました。親しみやすい『ドラえもん』だからこそ、素直に心に届くのかもしれません。

この言葉に、現代社会に生きる人々の多くが励まされるのは、自分という枠組みが強い時代だからではないでしょうか。自分の枠組みとは、「こうあるべき」「こうありたい」という思いです。仏教では、自分の枠組みが強固であるほど、苦しみも強くなると考えます。そしてこの枠組みを「執着」と呼びます。

こだわりが強い人ほど、それが上手くいかなくなると、イライラします。「お寺の鐘がうるさい！」「子どもの泣き声が許せない！」といった苦情も、枠組みが強い人の傾向です。

快適な空間を作ることに執着するほど、そして、自分が「こうあるべき」「こうありたい」という自分の枠組みに当てはまらなくなってしまうと、「こんな自分はダメだ」と思ってしまう。枠組みが強いほど、その思い込みも強くなるのです。

このような状態を、曇鸞大師という方は「蚕繭自縛」という言葉で指摘しておられます。「蚕繭」とは蚕のまゆのこと。蚕が自ら出した糸でまゆを作り閉じこもる姿を、執着という枠組みで自らを縛り付けている私たちの姿に譬えたものです。

そもそも、「こうあるべき」「こうありたい」という思い自体、本当に私が求めているものなのかどうか、怪しいものなのです。

以前、「今でしょ！」でお馴染みの予備校講師・林修先生が、TV番組で高学歴ニート（東大や早稲田、慶応大卒などの高い学歴を持ちながら、仕事に就かない人たち）に授業をするという企画がありました。「やりたい仕事でしか働きたくない」という彼らに林先生は、二〇一一年の東大受験に出た文章を紹介されたのです。

それは、アイヌの長老に「やりたいこと」を聞いたところ、その答えは何と…「素手で熊を仕留めたい」ということだったという文章です。これを聞いた彼らは「熊を素手でなんて！」と笑いました。

長老の思いとしては、熊はアイヌの世界では神の使いと崇められており、熊狩りも一つの宗教儀礼として考えられてきた。ところが、ある時期から熊を鉄砲で撃つようになってしまった。そのことに、気が咎めるからということなのですが。

では、なぜこの文章を林先生は紹介されたのか。それは、人間の「これがしたい」「これが好きだ」という願望は、環境や情報など外部の要因によるものだということを指摘するためなのです。ゲームを作る仕事がしたいと言っても、百年前に生まれていたらゲームそのものが無かったわけだから、その願望もあるはずがない。アイヌに生まれていたら、熊を素手で仕留めたいと思うかもしれない。自分のいる環境によって「やりたいこと」は変わる。

「自分がやりたいことって、結局テレビや雑誌の情報に踊らされていたんじゃないか」「人の思いが、いつの間にか自分の思いにすり替わっているのではないか?」と、林先生は自らの経験を通して語られました。そう考えると、「やりたいこと」「好きなこと」「こうありたい」という自分の思いや枠組みそのものが、怪しく思えてきませんか。

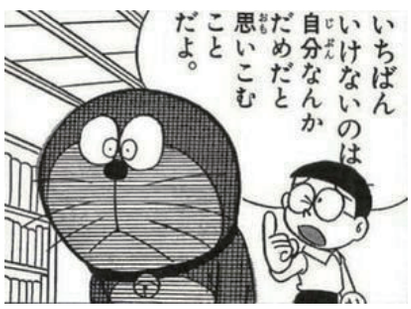
真宗僧侶で宗教学者の釈徹宗先生も、次のように言われています。

ある地点に立っていると、苦しみや怒りの連鎖がとまらない。でも、少し立ち位置をずらしてみると、見える世界が変わる。苦しみや怒りのカタチが変化する。そんなことが起こります。でも私たちはある地点に固着してしまって、なかなか立ち位置をスライドすることができません。何かの教えに導かれたり、別の価値と出会ったりする体験があったり、そういうことを通じて立ち位置が変わるのです。／一度、自分の枠組みを点検してみましょう。もしかしたら、私たちは他者の欲望に生きてしまっているのかもしれません。例えば、なぜ有名大学に入りたいのか。それは他者

釈先生は、NHK 平日夕方５時からの、『シブ５時』で、悩み相談コーナーにご出演中です！

が欲しているからできないでしょうか。なぜいいマンションに住みたいのか。よくよく自己分析すれば、それは他者が住みたがっているからでは？／他者や外的要因に振り回されない状態を、仏教では「自由（自らに由る）」と呼びます。例えば、お腹がいっぱいなのに「好物」を見るとつい食べてしまう。これは（好物に引っ張られてしまっているので）自由ではありません」

（釈徹宗『なりきるすてるととのえる』）



自分なんかダメだと思い込む。その思い込みを点検するだけで、間違いなく何かが変わります。日頃の価値観とは違う体験をすることも、立ち位置が変わり、見える世界が変わります。これは、現代社会に生きる私たちには、とても大切なことではないでしょうか。

私としては枠組みを点検するには、仏法に導かれる体験がお薦めなのですが、素直に心に届くのであれば『ドラえもん』の言葉でも結構です。ぜひ一度、自分の枠組みを点検してみてはいかがでしょう。そういう私も、点検しておかなければ。私もかなり、自分の枠組みが強いものですから…。■

物でお布施

ご報告（2019年分）

ご協力、ありがとうございました！

CD 664枚

DVD 14枚

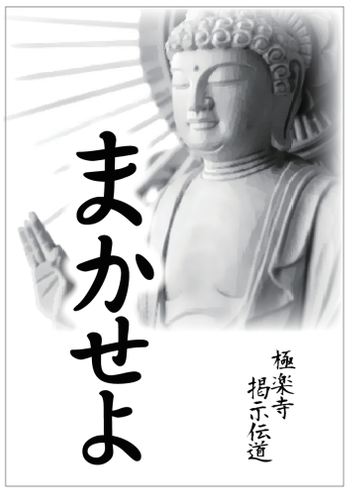
書き損じ葉書 90枚

アーユス仏教国際協力ネットワークで換金され、国内外の紛争や災害、環境破壊で困難を強いられた人たちのための活動に役立てられます。

これからも、ご協力お願い致します！

本堂に、回収箱が用意してあります

書き損じはがき・未使用切手・商品券
未使用テレフォンカード・ビール券など金券
CD・DVD・ゲームソフト
ゲーム機器



1月の言葉

「オレニマカセロ」という名前の競走馬がいたことをご存知でしょうか。名前は頼もしいのですが、残念ながら一度も勝つことができないまま引退。名前とは違って、頼りにはならなかったそうです。　しかし近頃は、「オレに、まかせろ！」と言ってくれる人が少なくなりましたね。昔は、そんな人がたくさんいました。ところが今はどうでしょう。責任を取り合うよりも、押しつけ合う時代です。

そんな時代ですから、責任を押しつけられないようにと、自分を守らなくてはなりません。気がつけば、私たちはいつもバリアを張り、周りを警戒しながら生きているのではないでしょうか。

とはいえ、いつもバリアを張りながら生きていくのは大変です。囲いの中では心は萎縮し、ストレスも溜まります。ある方が「木を囲むと『困る』、人を囲むと『囚われる』という字になる」と言われていましたが、自分を守るはずのバリアが、のびやかな成長を阻む壁にもなりかねないのです。そうなると、私に向けられる温かな心にも、思いもよらない豊かな世界との出遇いにも気づけなくなってしまいます。

だからこそ人間には、安心してバリアを外す場所、受け止められる場所が必要なのです。そういえば昨年、政治家の小泉進次郎さんが結婚を発表される際、お相手の滝川クリステルさんを「（彼女の前では）政治家・小泉進次郎ではなくて、人間・小泉進次郎という素のままの自分でいられる。そういった存在だ」と言われていました。確かに注目される人気政治家は、私たち一般人よりも強い緊張感でバリアを張って生活しなくてはならないでしょう。ならば、安心できる人や場があるかどうかで、日々の生活そのものが大きく違ってくるはずです。

あるショッピングモールでのこと。一人のお母さんが、赤ちゃんを抱えながら小さな男の子を連れていました。すると、男の子がグズり出したのです。「ちゃんと歩いて。お兄ちゃんでしょ！」とお母さんが言っても、男の子は「嫌だ、嫌だ」とますますグズります。その時お母さんが「ちゃんとして！」と、その子の頬っぺたを叩いたというのです。周りの人たちはビックリ！中には、「なんて酷い親なんだ」「虐待じゃないか」と、つぶやく人もいました。

すると、一人のお婆さんが、お母さんのところに近づいて、こう話しかけました。

「お母さん、子育て大変ね。お兄ちゃんも、お母さんが赤ちゃんのお世話で大変だから、寂しかったね」

お母さんは、その一言で、ボロボロッと涙をこぼし「ごめんね。ごめんね」と男の子をギュっと抱きしめたというのです。

常にバリアを張り続けていると、私たちは弱みを見せることができなくなります。しかし、自分を受け止めてくれる人と出遇う時、素直になれる。安心してバリアを外し、自分の弱さや愚かさを受け止めることができるのでしょう。そこに、思いもよらない世界が開かれていくのです。

阿弥陀如来は「かならず救う、我にまかせよ」と、私たちに呼びかけてくださる仏様だと言われます。「南無阿弥陀仏」のお念仏は、その「まかせよ」という呼び声だと。それは、私を一切否定せず、無条件に受け止めてくださる呼び声です。

そして、その呼び声に身をゆだね、安心感の中に人生を歩まれた人々の歴史があるのです。真宗僧侶で相愛大学教授の釈徹宗 先生は、「何か大きな存在に心身を任せる感覚がある人とない人では、ずいぶん人生が違うと思います」（『歎異抄はじめませんか』）と言われています。私たちは、そんな世界を見失ってはいないでしょうか。

私の尊敬する真宗大谷派の僧侶・宮城顗先生から教えられたお話です。宮城先生が、あるおばあさんから「私の家は代々他の宗旨だが、ご縁があって親鸞聖人の教えを聞かせてもらうようになった。今ではこの教えでなくては、私は救われないと思っている。だから、どうしても真宗に変わりたい」という相談を受けられました。宮城先生はその時「ご家族や、今までお世話になったお寺とも話をされ、了承が得られてから、またお話

しましょう」と答えられたそうです。

おばあさんは、子どもさんたちと話をされました。子どもと言っても、すでに五十歳近い方々。長男は、お医者さんです。日頃はお寺の事には無関心でしたから、きっとスムーズにいくだろうと思いきや、「代々お世話になったお寺を、簡単に変わるのはいかがなものか」と、みんなから強く反対されたのです。「お寺のことには無関心だと思っていた子どもたちも、ちゃんと考えていてくれていたのだ」と、うれしい気持ちもありながら、おばあさんは困ってしまいました。

そんな時に、おばあさんに胃癌が見つかったのです。息子さんはお医者さんですから、どのような状態かはわかります。そんな状況になって、改めて「やはり自分は真宗に変わりたい。私は真宗でなくては救われない」と言われると、子どもさんたちも「そこまで言うのなら、いいよ」と納得してくれたのです。

そして入院前、宮城先生のお寺で、真宗へ変わる法要を勤めました。その帰り際、おばあさんが宮城先生にこう言われたそうです。「これで安心して、悶えてこれます」と。

これからの入院生活、つらいことも、苦しいこともある。これまで思いもよらなかった醜い自分が出てくるかもしれない。しかし醜さや愚かさをさらけ出しても、「そんなお前はダメだ」と切り捨てられるような教えではない。どこまでも「かならず救う、我にまかせよ」と、受け止めてくださる教えをいただくことができた。これで安心して悶えてこれると。だから最後まで、精一杯生き抜くことができるのだと。

仏教でいうところの「信じる」という言葉は、インドのサンスクリット語ではチッタプラサーダといい、心が落ち着いて澄んでいる状態を言います。ですから仏教では、ただ盲信することを信心とは言わないのです。教えを受け、身も心も納得している状態、ゆだねている状態を「信」とするのです。

この私を「まかせよ」と、無条件に受け止めてくださる阿弥陀様の呼び声に身心をゆだねた時、思いもよらない豊かな世界が広がることを、先を歩まれた方々から教えられています。■

極楽寺ホームページ

極楽寺だよりの過去の記事をはじめ、盛りだくさんの内容です。

極楽寺.com で検索を

害獣被害対策について

御正忌の際にもお知らせしましたが、極楽寺の屋根裏にアライグマが侵入していることがわかりました。業者さんの調査ではイタチやテンなど他の動物も入り込み、フンなどで酷い状況だとのこと。これから巣ごもりの時期となり、住み着いてしまうと被害はますます大きくなります。緊急のことでもありますので、総代・世話人さんに相談し、対策工事を行いました。

なにせお寺は広いので、金額も高くなります。役員さんの了承のもと、本堂と座敷部分の885,962円を、門徒会計より支出することにしました。

本堂の雨どい受け取替工事に続き支出が重なり、本当に申し訳ありませんが、何卒ご了解いただきますようお願い致します。

【施行内容】

- ◆ フン等の撤去・消毒
- ◆ 捕獲・追い出し
- ◆ 侵入口ふさぎ
- ◆ アライグマ・テン・イタチ 10年間侵入無償対応

捕獲されたアライグマ。でかい！猫の約二倍の大きさでした。

お知らせ

極楽寺納骨堂運営委員長を勤められた中村寿一さんがご往生されました。長い間お世話いただき、ありがとうございました。

住職からのお願いです

引き続き、今回も・・・

夜の法座に、お参りください

「お取越し」から「御正忌報恩講」までの慌ただしい日々が終わり、ようやく一息ついています。とはいっても、実はこれからが、また私にとって大切な時期なのです。新しい情報をインプットして視野を広げたり、今のうちにできる仕事を終わらせたり…。よく「〆切が近づいて、追い詰められないとパワーが出ない」と言われる方がありますが、何とうらやましい！私などは気が小さいせいか、〆切前になると焦ってしまいパフォーマンスが落ちるタイプなのです。それで、何度失敗してきたことか。早めに終わらせておかないと、不安でなりません。そんなこんなで、「できることは、今のうちに」と一年中慌ただしく過ごしています。でも、もう少しゆとりを持たないと、大切なことを見失ってしまうのではという不安もあって…。やれやれ、困ったものです。（住職）